



庄内町出身で明治維新に火をつけたといわれる幕末の風雲児、清河八郎。鶴岡市出身の作家藤沢周平さんは小説「回天の門」で、その波乱の生涯を描いた。東京のまちづくりグループ「元氣・まちネット」(矢口正武代表)戸沢村出身)は、八

郎が学者を志して郷里を出奔し江戸に向かった県内ルート。「回天の道」と名付け、藤沢さんの記述に沿って検証することにした。2回に分けて行う計画で、まず前半の踏査に同行した。(文)村山支社・伊藤哲哉、写真)報道部・色摩高幸

清河八郎「回天の道」

「元氣・まちネット」踏査同行記

①

Q 清河八郎 1830(天保元年、清川村(現庄内町清川)に生まれた。裕福な酒屋の長男だが、18歳の時に家出して江戸に上り、25歳で学問と剣の塾を開いた。その後、尊王攘夷の急進派と「虎尾の会」を結成。幕府に追われ潜伏しながら諸国を遊説し、討幕の志士を結び付けた。1863(文久3)年には幕府に働き掛け浪士組を組織したが、同年、志半ばで暗殺された。八郎の死後、浪士組は新徴組、新選組となり、時代は明治維新へと激動する。

その場面は「回天の門」に「強引な理屈だったが、八郎の弁舌には一種鬼気迫るほどの迫力があつた。声は本堂の隅隅まで透(とお)る。隊士たちは身動きを奪われたように肅然と聞いていたが、八郎が言葉を切ると『いかにも』その通りだ』という声が飛んだ』などと描かれている。「回天の門」は1977(昭和52)〜78年に山形新聞に連載され、79年に本が出版された。清河八郎記念館の広田幸記副館長(64)は「初代館長の成沢米三さんが藤沢さんの恩師だった関係もあり、藤沢さんは何度も記念館を訪れた」と話す。

矢口代表ら4人の踏査隊は最初、清河八郎が生まれた庄内町清川を訪れ、生家跡や墓のある歓喜寺、さらに文武両道の神として八郎を祭る清河神社などに足を運んだ。同神社境内の清河八郎記念館は、没後100年を記念して1962(昭和37)年に建てられた。八郎の遺品など貴重な資料百数十点を保管し、一部を展示している。「霞ヶ関一条」はその一つ。1860(万延元)年、大老井伊直弼が水戸浪士らに討たれた桜田門外の変の直後に、八郎が見聞した事件の様相を詳しく

は、それまで時勢からは一歩引紙だ。熱中して書いた八郎は「三いた姿勢でいたが、この事件に衝撃を受け、攘夷(じょうい)に運ばせた」(「回天の門」) 清河神社の鳥居のそばには八郎の座像がある。1863(文

出身地・清川を訪ねて

攘夷説く弁舌 藤沢作品に

「草莽ゆえに多くの誤解」

文武両道の神として清河八郎を祭る清河神社。座像は浪士組に熱弁を振るう八郎を再現している 庄内町清川



久3)年、京都の新ということは、八郎の足跡を丹徳寺で浪士組234念にたどれば、まもなく明らか人を前に尊王攘夷のなることである」と書いた。大義を説く姿を再現。八郎は「この演説の外にいる身分の低い草莽(そうぼう)により、將軍上落(じょうらく)の志士だった事実(じじつ)にようらぐ)の護衛をり、「草莽なるがゆえに、その名目(めいもく)に集めた浪士組行跡(ぎょうせき)は屈折(くつせつ)、多くの誤解(ごかい)を残を、一転して尊王攘夷(そんわうじょうい)しながら、維新前期(いしんぜんき)を流星(りゅうせい)のよう(よう)に走り抜けて去ったように思われる」と評している。



清河八郎「回天の道」

「元氣・まちネット」踏査同行記

②

「羽州田川郡清川村。そう呼ばれる最上川べりのこの土地は、十四万石酒井家が支配する庄内領の咽喉(いんこう)部にあたっていた。江戸あるいは仙台、羽州内陸諸藩と庄内領をつなぎ、もともと多く人と物資が通過する場所で、藩はここに関所を置いていた」(藤沢周平「回天の門」)

影響与えた藤本鉄石描く

生誕地で生き方に触れる

代々続く酒屋、斎藤家の長男として生まれた。斎藤家は庄内一の醸造石数を誇り、山林や砂金採取の収入もある大金持ちで、庄内藩から名字帯刀を許されていた。八郎の父や祖父は文人墨客を愛し、屋敷の後方に「楽水楼」を建てて立ち寄る人をもてなした。

1846(弘化3)年、斎藤家は藤本津之助という旅旅館に滞在した。後に天誅組総裁とな



と重ねて問う藤本に、八郎は「そうです」と答え、江戸に出て学者になる決心を打ち明ける。八郎は翌年、家出して江戸行きを実行した。

清川の清河八郎記念館は、八郎が暗殺される前年の1862(文久2)年、藤本鉄石が描いた八郎の肖像画を所蔵している。死後、似た人をモデルにした肖像画もあるが、藤本の作品は八郎の「実像」を伝える貴重な資料。何重ものきり箱に収められたまま大切に保管している。

「実像」伝える肖像画

清河八郎記念館には、藤本鉄石が描いた八郎の肖像画が大切に保管されている

1846(弘化3)年、斎藤家は藤本津之助という旅旅館に滞在した。後に天誅組総裁とな

文||村山社社・伊藤哲哉、写真||報道部・色摩高幸



肝煎から添川へ

清河八郎「回天の道」

「元氣・まちネット」踏査同行記

③

清河八郎が1847(弘化4)年に郷里を出奔し、江戸に向かったルートを探る「元氣・まちネット」(矢口正武代表・戸沢村出身)の踏査隊は、八郎の生家があった庄内町清川から立谷沢川の清流沿いを徒歩と車で移動し、同町肝煎の鉢子集落で町議の吉宮茂さん(61)を訪ねた。

追跡を避けて山伏峠に

頂上付近見渡す庄内平野

吉宮さんは「羽黒山修験道を守る会」のメンバー。同会は2006年、鉢子から羽黒山の山頂に通じる古道を整備した。古道には出羽三山を開いた蜂子皇子(はちこのおつじ)にまつわる言い伝えがある。「江戸時代には清川の関所で船を降りた人

八郎はこの参道ではなく、鉢子より清川寄りの肝煎集落から山に入り、当時の添川村(現鶴岡市)へ抜ける道を通った。そこから手向村(同)まで南下し、藤沢周平さんの小説「回天の門」によると、八郎は家族が書き置きを見て家出に気付くことを予想し、捜索人の追跡をかわすため、山に囲まれた山伏峠にかかるころ、夜は白つ

八郎はこの参道ではなく、鉢子より清川寄りの肝煎集落から山に入り、当時の添川村(現鶴岡市)へ抜ける道を通った。そこから手向村(同)まで南下し、藤沢周平さんの小説「回天の門」によると、八郎は家族が書き置きを見て家出に気付くことを予想し、捜索人の追跡をかわすため、山に囲まれた山伏峠にかかるころ、夜は白つ

八郎はこの参道ではなく、鉢子より清川寄りの肝煎集落から山に入り、当時の添川村(現鶴岡市)へ抜ける道を通った。そこから手向村(同)まで南下し、藤沢周平さんの小説「回天の門」によると、八郎は家族が書き置きを見て家出に気付くことを予想し、捜索人の追跡をかわすため、山に囲まれた山伏峠にかかるころ、夜は白つ

清河八郎が歩いた峠道を探していた踏査隊は、絶好のビューポイントに出合った

鶴岡市添川



た」と振り返る。肝煎側の山道は今は整備されていないため、一行は添川に回り、「地蔵の湯」から林道を上った。この旅館の入り口では、「幕末志士清河八郎休養之地」と刻まれた石碑を確認。宿の男性(62)は「湯の沢川沿いの山道は山伏峠と呼ばれ、立谷沢の神社にお参りしたり、小学校の遠足にも使われた」と語る。

そこからの景色は、頂上付近で、踏査隊は素晴らしいビューポイントを見つけた。あすまやが整備

山伏峠にかかるころ、夜は白つ

の三角点から庄内平野が見渡せ

真報道部・色摩高幸

写真



清河八郎がお蓮と出会った湯田川を踏査する「元気・まちネット」のメンバー＝鶴岡市

湯田川温泉

清河八郎「回天の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

④

1855(安政2)年、清河八郎は母を伴い約半年間、諸国を旅した。鶴岡市出身の作家、藤沢周平さんの小説「回天の門」によると、江戸から同志の安積五郎を連れて郷里の清川村(庄内町)に帰った八郎は、庄内見物に飽きると湯田川温泉(鶴岡市)で豪遊する。

鶴岡の遊郭から連れてきた女たちとドンチャン騒ぎし、安積は節分の豆まきをまねて金をまいた。この酒宴で、八郎は高代という遊女と巡り合う。その女は、一人だけ部屋の隅に坐(すわ)っていた。女は騒ぎには加わらずに、ひっそりと座敷の中の混乱を見ていた(「回天の門」)。

高代は熊出村(鶴岡市)の出身で、翌年、八郎の妻になり、蓮と名前を改める。宴会をした宿

妻お蓮と出会いの地

新徴組隊士、2年間居住

仙台で新婚生活を送った後、江郎の足跡をたどる中で、出身地の戸に移った。1861(文久元)の鶴岡市熊出にもお蓮の墓がある。八郎が男を切った事件で幕府に追われる身となり、お蓮は同志とともに捕らえられた。お蓮は拷問に遭っても八郎をかばったというが、翌年、獄中ではお蓮の墓は、庄内町清川の歓喜寺と東京の伝通院にある。東

京のまちづくりグループ「元気・まちネット」(矢口正武代表)の踏査隊は、八庄内藩に預けられ、大政奉還後

は同藩とともに庄内に入った。隊士136人とその家族は鶴岡から約8km離れた湯田川の旅館、民家37軒に分宿し、単人旅館に本部を置いた。「まちネット」の踏査隊は単人旅館に泊まり、新徴組の隊士が眠る湯田川の墓地などを訪ねた。この旅館には新徴組が使った弾薬箱が残っている。黒い木箱で旅館では米びつにしていたという。主人の庄司重雄さん(64)は「清河八郎は湯田川温泉に何度か来ている」と話し、旅館で代々、八郎



真II報道部・色摩高幸)

踏査隊は前半の目的地である田麦俣に到着。清河八郎の健脚ぶりを実感した

鶴岡市



六十里越街道・松根—田麦俣

清河八郎「回天の道」

「元氣・まちネット」踏査同行記

⑤

鶴岡市出身の作家、藤沢周平 1880(明治13)さんの小説「回天の門」による年からは頂上の2方と、1847(弘化4)年に家出して郷里の庄内町清川から江戸を目指した清河八郎は、現在の鶴岡市添川、

手向を経て、松根から六十里越街道に入った。

松根は庄内から湯殿山に登る玄関口で、出羽三山信仰の重要な拠点だった。かつて最上川の支流だった赤川を舟で上った行者たちは、松根の渡りで降りて

十王峠へ向かった。松根の八幡神社から十王峠までは険しい上り坂で「ウナギの背中より滑る」といわれた。

十王峠には三つの地蔵が立つが、昔は少し離れた山頂を通り、仏像が10体あったことからそう呼ばれたという。夏は暑さを避けて夜に行き来する人も多く、



1日40キロ 健脚ぶりを実感

「袖の下」渡した関所越える

つたのは、数十年前に地滑り被害を避けるため移転した関谷の旧集落付近。無事に関所を通った八郎は、急坂の塞ノ神峠を越え、田麦俣に泊まった。踏査隊は車で関谷から国道112号に出て、踏査前半の目的地である田麦俣へ移動した。

「清川から田麦俣まで約40キロもあり、難所の峠も多い。ここを一日で歩いた清河八郎の健脚ぶりを実感した」と矢口さん。

「東京で下調べはしてきたが、訪ねてみて初めて分かったことも多い。八郎への興味が一層深

看板に書かれている。

八郎のルートを探る東京のまちづくりグループ「元氣・まちネット」(矢口正武代表)戸沢村出身)の踏査隊は、十王峠からむと歯が痛くなるからという説があるそうだ。「八郎もここに道には落ち葉が積もり、大きなトチの実など木の実がたくさん落ちていた。一行は切り株や岩に注意しながら、フカフカした古道の感触を楽しんだ。

峠から大網方面へ10分ほど進んだ」と収穫を語る。踏査メモ「伊太や清水」へ。名前のンバーの佐野千晶さん(東京都渋谷区)は「出発点の清河八郎記念館(庄内町)でいろんな話を聞き、当時の様子が分かった。その後の旅がより楽しくなった」と振り返る。

踏査の後半は、田麦俣から六十里越街道を経て上山へ向かう計画だ。

「おわり」

「回天の門」には、八郎が大網の関所で役人に「袖の下」を渡す場面が出てくる。関所が真報報道部・色摩高幸